

証券市場の一般均衡分析 講義要項

京都大学経済研究所 原 千秋

2008年10月2日

目的

この講義の目的は一般均衡論的に基づく証券市場分析の方法を紹介することにある。投資家の効用関数（リスク許容度や異時点間の消費の代替可能性）を明示的に取り上げ、効用最大化行動の帰結として最適ポートフォリオや均衡証券価格を説明することを分析の主眼とする。今年度は特に、証券取引を通じたヘッジが不可能な background risk の存在が、最適ポートフォリオの決定に使われる効用関数にいかに関与を及ぼすかを詳細に分析する。

前提とされる予備知識

大学院修士課程1年目の水準のミクロ経済学および多変数関数の微積分・線型代数・確率論に代表される、経済学に不可欠な数学。基本的には修士課程2年生が対象。

参考文献

1. Gollier Christian Gollier, 2001, *The Economics of Risk and Time*, MIT Press.
2. Chi-Fu Huang and Robert H. Litztenberger, 1988, *Foundations for Financial Economics*, Appleton & Lange.
3. David M. Kreps, 1988, *Notes on the Theory of Choice*, Westview Press.
4. Andreu Mas-Colell, Michael D. Whinston, and Jerry R. Green, 1996, *Microeconomic Theory*, Oxford University Press.

この講義の内容には、おそらく Gollier (2001) が最も近いであろう。期待効用関数の基礎や意思決定論的なトピックについては Kreps (1988) が、リスク回避度については Huang and Litztenberger (1988) が詳しい。Mas-Colell, Whiston, and Green (1996) は標準的なミクロ経済学の教科書で、期待効用理論にも詳しい。

オフィス・アワー

特に定めないが、面談を希望する者は事前に私宛にメールを送ること。電話は使わないこと。

評価の方法

持ち込み一切不可の、数学的な問題より成る期末試験のみに基づく。